

一次産業盛り上げたい



サクランボでは紙器ori oriで売り上げが2倍になった農家も。フードロスや単価の上昇にもつながっている

天ぶら金万(飯田市主税町)の田巻茂代表(54)らが開発販売している紙製容器「紙器ori ori」(しきおりおり)が、果物の品質を保持できるとして、農家で利用が広がっている。

紙器ori oriはコロナ禍だった2021年、テークアウト容器として田巻さんと愛知、静岡、千葉3県の企業が共同開発した。木材を原料としたバージンパルプを使用しており、高い保温力と保温力が特長の一つ。宿泊観光施設や飲食店で利用が拡大した。

田巻さんは保温力が農産物の保存にも役立つと考え、松川町のサクランボ農家に紹介した。1週間たつてもみずみずしく光沢感が保たれている状態に農家から驚きの声上がり、採用が拡大。昨年度、同町サクランボ部会に所属する農家の3割が紙器ori oriを採用し、本年度はさらに増え7割の農家が採用した。

品質を長く保つことができ

紙器ori ori 品質保持で農家の収益向上

ようになったことでフードロスが減少。さらに単価が上がり農家の売り上げが上昇し、ある農家は同じ収穫量で売り上げが約2倍になったという。

ブドウやブルーベリーなどほかの果物でも利用が広がり、高森町の藤木農園では贈答用シャインマスカットの容器として採用した。県外でもブドウの名産地・山梨県でも利用されているという。

田巻さんは5月、紙器ori oriの新会社を設立。同製品を販売するだけでなく、どういう生かし方があるか考



ブドウなどほかの果物にも利用が広がっている

え、顧客に提案している。果樹農家との「紙器ori oriプレミアムフルーツパートナー」契約も開始。同製品を使っている県内のホテルが販売窓口となり、宿泊客から注文が入ると契約農家が旬の果物を宿泊客の住所に送る。現在は7軒の農家と契約している。

田巻さんは「第1次産業を盛り上げたいというのが一番の思い。品質保持だけでなく、稼ぎが増えれば農家の後継者増加にもつながる」と語り、「将来は輸出にも貢献できれば」と話した。